

# 保育現場における男性職員が抱える課題

—ジェンダー視点からの検討—

小田 進一・梅原 健吾・佐藤 瞭・齊藤 巧馬

**抄録：**認定こども園の男性保育士を中心とした実践を理論化する取り組み。保育の職場での男性職員の位置と課題について知るために保育現場で働く男性職員のジェンダー問題を見直した。実際に現場で働いている保育者の意識、保育所保育指針や教育基本法など、多くが「保育の専門性」を性差に関係なく専門的知識や技能と捉えているにも関わらず、男性職員に求められる役割として、ジェンダーステレオタイプが現場に内在していることがわかった。

徐々に男性が進出してきている保育職であるだけに、ジェンダー意識・課題意識についてさらなる点検が必要であることが示唆された。

**キーワード：**男性職員，ジェンダー，保育の専門性

## 1. はじめに

女性の職業と捉えられてきた保育職であるが、昭和52年に「保母」から「保育士」へと男性の保育士資格が認められ、昭和60年に男女雇用機会均等法が制定されてから、今日までに保育に携わる男性が増加してきており、多くの保育現場に男性職員がいるという環境がある程度普及している。しかし、厚生労働省の賃金統計（e-Stat 平成28年賃金統計調査）では、全国で14530人（平成28年）で、保育者総数の5.4%に過ぎず、平均勤続年数も、6.1年（女性保育士は、7.8年）と定着しているとは必ずしもいえない。男性の保育士は圧倒的に少数者なのだ。現実には男性であるがゆえに雇用しない園も存在すると聞く。さらに、近年「男性保育士にオムツ交換をして欲しくない」などということがメディアで取り上げられ、保育現場における男性職員は世間から消極的なイメージを抱かれている。男性保育士による事件などの影響か、男性保育士に対して消極的なイメージを持つ保護者も存在している。

そのような背景に対して男性が保育職へ進出するためには、消極的なイメージを持つ男性職員が積極的に現場に参入し、保育を実践することである。青野は男性が保育職に参入することは男性保育者とは何かを問いかけるだけでなく、女性職員を含めた「保育者の再定義」をもたらすことを示唆しており<sup>1)</sup>、男性職員の保育職での新たな立ち位置を定める可能性を秘めている。

筆者らは、2017年から、「男性職員」に焦点を当て、保育現場における男性職員の期待と実現に向けて研究を行ってきた。これまでに、第8回幼児教育実践学会、第22回北海道子ども学会、保育士養成教育学会第2回大会などにて提言しており、その経過の中で、「保育実践の場における専門職の在り方に関わる性差」や「子育てと父母の関り」等研究の広がりを見ている。

## 2. 研究の目的と方法

これまでの研究で「保育職とは男女の性差関係なく保育の専門性を持つもの」として保育者を定義

することを理想としていた。しかし、「男性保育士のオムツ交換」などの消極的なイメージをメディアで取り上げられ、実際の現場からも「ジェンダーステレオタイプが内在している。」「男性は未満期をなかなか担任にさせてくれない。」などの意見を得、理想と現実の隔たりを感じるようになった。

本研究では、保育現場における「ジェンダー問題」と「保育の専門性」について調査し、「保育者の定義」とは何なのかという問いに、筆者らの体験を含めて考察し、さらに実践者等の意識等の実態を明らかにするための資料を得たい。

### 3. 男性保育者における「保育者」の定義

保育に携わる男性職員が増加している現在であるが、保育者総数のわずか5.4%と女性職員に比べると明らかに少数派である。少数派として保育現場へ参入している男性保育者は、「保育者」の定義をどのように捉えながら職務に当たっているのだろうか。中田によると、男性保育者による「保育者」の定義のシークエンスは3段階に分けられ、それは経験年数によって捉える定義が変化していく。若手の男性保育者は第1段階として「第二の家庭の父母」として「身体を使う」保育を行うことを示し、ある程度経験を積んだ男性は第2段階として「保育の偏りを是正する者」とし、これまで女性職員のみで担われてきた職務に対して、男性の視点を強調した保育を取り入れようとする。そして、かなり経験を積んだ男性は第3段階として「子どもの発達を促す者」とし、「子どもの発達をうながす働きかけ」をする保育をしていたと述べている<sup>2)</sup>。つまり、男性保育者が思い描く「保育者」の定義とは、初めは男性として少数派である自分を確立するために「男性を意識した保育」を担う存在から、経験年数を重ねるにつれて「保育の専門性」を高めていく存在として変化していくようになる。

### 4. 保育の専門性と男性保育士

私達は、男性保育者として保育職に勤務しているが「保育者」の定義をどう捉えているのか。初めは男性が1人という状況で「女性保育者の保育の真似をしよう」と日々保育をしていたが、徐々に働き方が分かってくると鬼ごっこなど身体を使った遊びを好むようになった。その理由は、子ども達が『鬼ごっこしよう』と私にダイナミックな遊びを求めてくるが多かったからであり、次第に「身体を使った遊びは男性が積極的に担うもの」と捉えるようになる。中田も「保育者」の定義を男性保育士は「第二の家庭の父」として職務に当たることを示していることから、有力な意見であることが分かる。しかし、私達は「第二の家庭の父」としての役割から、現在は「保育の専門性」を担う者として保育者は「性差関係なく保育を行っていくもの」とであると捉えている。

行政は「保育の専門性」について「子どもの人格形成や生命の保持及び安定を図ることを念頭におき、専門的知識・技能を用いて様々な視点から子どもと関わること」としている<sup>3)</sup>。だが、今日の多くの保育現場において性差はどの程度意識されているのであろうか。一般的には、保育現場に男性保育士がいることで「男性の育児参加の促進」や「男女ともにいることで、子どもにも良い影響を与えること」「ダイナミックな遊びを提供できる」<sup>4)</sup>といった期待がされている。しかし、その一方で、「男性保育士にオムツ交換や着替えをさせないでほしい。」といった声も出ている。つまり、専門職・専門家の関わりの内容について検討する際にジェンダーがどのように関わるのかを問うことなのではないか。

## 5. ジェンダーと保育現場の実態

ジェンダーとは、一般に「社会的・文化的性」とされる。それは、社会や文化によって規定される「女らしさ・男らしさ」に限定されず、身体を含む「女」と「男」のありようが、社会・文化・歴史とのかかわりで構成されることを包括する概念である<sup>5)</sup>。男女雇用機会均等法や、男女共同参画社会基本法を経て、1999年に児童福祉法施行改正により、「保母」から男女関係ない「保育士」と資格名が変わり、保育現場では男性も働きやすい環境へと変わりつつある。高橋は、「男性保育士をとりまく現状について、ジェンダー等の視点や性差による役割の固定的視点にとらわれず、同じ職場で働く同僚、保育者として、お互いに「保育の専門性」を向上させることが重要であると示している。」<sup>6)</sup> 実際働いていると、園庭整備、物品の搬送などの際も、男性職員が中心にそれらの職務を任けていることからジェンダーステレオタイプが内在していることが分かる。しかし、それは男性職員として保育現場で働く上で負担にもなるが、男性保育者としてのアイデンティティを確立するための強みであることや、ピアノが苦手な男性は女性保育者をお願いするなど、「得意」「不得意」で役割分担をすることで円滑に働ける側面もある。

保育職は、女性性というジェンダーを基準にしてカテゴリー化されている職業であると考え、男性が保育職に加入すると、「なぜ女性は保育職であり続けるのか」という疑問から、女性の存在意義の危機を感じることもある。そのため、自分の立場を守るかのように「これまでどおりで何が悪いのか」との主張になる。また、男性保育者についても同様に、男性も「女性の保育者の保育」を取り組んでしまうと男性としての存在意義が危うくなってしまふ<sup>7)</sup>。そのため、この保育職において、“保育の専門性”は男女ともに向上に努めていくものとされているが、今まで女性職と捉えられてきた保育職に男性保育者が参入することは、これまでの保育職という社会や文化の在り方からも容易なことではないことが分かる。男性としての強みを持つことが保育職として働き続けることに繋がるかもしれないが、ピアノが不得意な女性や走ることが不得意な男性など、個人で得意不得意なことが異なるのではないかと。多様性が求められる社会の中、その個性を尊重していく必要性を感じ、男性として女性としてジェンダーの枠組みにはめるのではなく、1人の「人」として様々な人が存在することがこれからの保育現場に求められるものではないかと考える。しかし、理想を語りつつも実際の保育現場を振り返ると男性保育者が働き続けることは容易ではないことに変わりないであろう。

## 6. 男性保育者が働き続けるために

中央教育審議会（2005）では子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方において、「現在、女性教員の割合が9割を超えているが、ある程度幼稚園にも男性職員がいる方が幼児の教育上好ましいとの意見も踏まえ、男性職員の割合を高める方策等を講ずることが望まれる」と明記している。また、青野は、「男性保育士が増えていくことで、男性的役割と女性的役割が統合され、それぞれが個性を活かした保育ができる。」と男性の参入が保育内容の幅を広げることや、男女に開かれた専門職として確立するためにも大切なことだと述べている<sup>8)</sup>。

しかし、文部科学省「学校基本調査」によると令和元年の幼稚園全体（93,579名）のうち男性職員の割合は約6.6%（6,193名）、厚生労働省「保育士等の」によると保育士全体（約1190,00名）のうち男性の割合は約4%（約50,000名）と両方とも極めて男性職員の割合が低いと言えるだろう。

男性保育者が少ない原因について、数多くの研究がなされているが、齋藤らは主に職場の人間関係

や賃金の安さ等の経済的な問題、性別分業観を挙げている<sup>9)</sup>。職場の人間関係について、中田は、男性の立場について、有利でも不利でもなく不安定であり、その不安定さが「男性」という性別を際立たせ、「男性保育者」という社会的カテゴリーを生み出し、職務のジェンダーを可視化させると述べている<sup>10)</sup>。また、菊池は、男性保育者がいる園の女性保育者の男性保育者に対する態度は人数比の顕著性により、実際以上に評価され、多数派である女性保育者から「少数派らしい」行動を期待され、男性保育者が重圧に悩んでいると述べている<sup>11)</sup>。

以上のように、少数派である男性保育者を取り巻く環境は、多方面から男性の保育職への参入、継続、職務の遂行を難しくしているといえよう。

## 7. 男性保育者が感じるジェンダーステレオタイプについて

前項でも述べたように、保育現場において、男性保育者は極めて少なく、女性保育者が大半を占めるため、職場に1人しか男性保育者がいない園も多い。そのため、同性の保育者のいない男性保育者について、青野は、男性保育者は自己の能力を性別による特性と考える傾向があり、女性保育者と比較して自分にはできないこと（苦手なこと、まかせてもらえないこと）に気付かされ、仕事としての保育に疑問を持つようになる。それを克服するため、「男性保育者の存在意義」を求めようとする<sup>12)</sup>。「男性保育者の存在意義」として、男性保育者が挙げるものとしては、力仕事や父親的役割といったジェンダーステレオタイプが主となっているようである。

それでは、少数派として実際に保育現場で働いている男性保育者は、女性保育者との違いをどう感じているのだろうか。青野の男性保育者に対する聞き取り調査によると、「乳児保育は母親的役割の強い女性が適任ではないか」「力仕事は男性がやることが多い」「ピアノは女性の方が上手」「女性の方が細かい気配りができる」などが挙げられていた。また、井上の調査によると、女性保育者が男性保育者に期待する役割や働きは、「ダイナミックな遊び」「父親的役割」「力仕事」「防犯」などが主となって挙げられ<sup>13)</sup>、両性とも、互いにステレオタイプを感じていることがわかる。

しかし、実際の保育現場において作用しているのは、女性の持つ男性性ステレオタイプが中心になっていないだろうか。中田は、男性と女性の人数の不均衡が、職業を女性性に傾けることや、職務を男女に振り分けた時に男性の職務を男性性に傾けることにつながると言っている<sup>14)</sup>。そのため、男性は、女性に感じている優位性と周囲に抱かれる期待の両方を受け持っている状況である。

## 8. まとめ

本稿では、男性職員が保育職に進出するための「保育者の再定義」について、「保育の専門性」と「ジェンダー問題」を筆者らの実体験を踏まえて考察を行ってきた。筆者らは当初「保育者とは男女の性差関係なく保育の専門性を持つもの」として保育者を定義することを目標としていた。保育現場に潜む「ジェンダー問題」が明らかになり、一方的に理想を述べるのが困難であることについての理解が深まり、至極当然と考えてきたものへの疑問を抱くこととなった。それは、「保育の専門性」を性差が関係なく専門的知識や技能と捉えているにも関わらず、男性職員に求められる役割として、ジェンダーステレオタイプが現場に内在しているということである。女性に偏る職業に男性が参入するとき、これまで疑問視されていなかった問題が顕著化するのである。それは、本来大切にすべき「保育の専門性」を介さずに、ジェンダーの枠組みにはめて、お互いの立場を守るようになることである。

男女がそれぞれの存在意義の危機を脱するには、男性と女性の人数の不均衡がジェンダーの間へとつながることを踏まえて、男性の保育職への参入や継続についての課題への対応が求められる。

中田は「男性保育者について、保育職における人間関係上発生する問題により規程される」<sup>14)</sup>とし、トークン現象に注目する。カテゴリーのトークン（象徴）として男性保育士を捉えると、「トークンは可視性、対称性、同化という特徴を持つ。可視性では、トークンは注目の的になり、私的な行動が許されない。トークンはトークンに縛られもするが、自分に有利になるように働きかけることもできる。特に同化に関しては、トークンにステレオタイプを打ち破るだけの多様性があればその偏見を崩れるが、そうでない場合、トークンに当てはまらない個人の特徴は無視される。対照性ではドミナント（多数派：女性保育士）はトークンが現れると集団として意識を高め、自分達の共通を維持し、攻撃的になったり有能さを誇張したりして相違性を顕示してトークンを疎外するのである」<sup>15)</sup>。以上のように、これまで女性職として捉えられてきた保育職の歴史がジェンダー問題を作り上げているのであり、性差にこだわらない専門職として女性保育者との協力、協働を求めることが必ずしも問題解決にならないのである。保育現場で少数派な男性保育者が進出するためには、ジェンダー問題と向き合いながら積極的に保育現場に参入することで、男性職員が男性の保育者としての存在を示し続けることが保育職の歴史を新たに作り上げ、ジェンダー問題を解決することにも繋がるのではないだろうか。

## 文献

- 1) 青野篤子 (2012) : 「ジェンダーフリー保育」, 『多賀出版株式会社』
- 2) 中田奈月 : 男性保育者による「保育者」定義のシーケンス . 45-47, 家族社会学研究, 2004
- 3) 厚生労働省 : 保育所保育指針 (2017) 総則, 文部科学省 : 幼稚園教育要領 (2008) 総則
- 4) 吉崎, 溝口他 : 保育とジェンダー～男性保育士が語る～ . 8, 全社協, 2017
- 5) 河野銀子・藤田由美子 : 教育社会とジェンダー . 4, 学文社, 2014.
- 6) 高橋智宏 : 保育士の育成に関する研究—男性職員に焦点を当てて— . 58, 保育科学研究第 5 巻, 2014.
- 7) 中田奈月 : 男性保育者による「保育者」定義のシーケンス . 49-50, 家族社会学研究, 2004
- 8) 青野篤子 (2012) : 「ジェンダー・フリー保育」, 『多賀出版株式会社』
- 9) 齋藤正典・平田健朗 (2008) : 「保育現場における男性保育者に対する意識調査」, 『盛岡大学』, p.67-77
- 10) 中田奈月 (2002) : 『「男性保育者」の創出—男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響』, 『保育学研究 40 巻』, p.196-204
- 11) 菊池政隆 (2002) : 「男性保育者に対する態度～女性保育者・保護者・学生から見て～」, 『保育学研究 40 巻』
- 12) 青野篤子 (2012) : 「ジェンダー・フリー保育」, 『多賀出版株式会社』
- 13) 井上清子・石川洋子 (2008) : 「男性保育者に求められる役割と問題」, 『生活科学研究』, p207-214
- 14) 中田奈月 (2002) : 『「男性保育者」の創出—男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響』, 『保育学研究 40 巻』, p.196-204
- 15) 中田奈月 (2018) : 「女性に偏る職業で男性は何をしているか」—男性保育者の事例から, 『日本労働研究雑誌 10 月号』